

青梅市文化財ニュース

第394号

令和2年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

呑龍様一延命寺

呑龍堂は、明治15(1882)年から20(1887)年頃に群馬・埼玉・長野あたりのお寺が中心となり建立されたそうです。また、呑龍堂は、浄土宗のお寺に多く建立されましたが、他の宗派のお寺にも建立されました。

青梅の呑龍堂は、青梅駅を降りて真直ぐ行くと、青梅駅前交差点(旧青梅街道)に突き当たります。しばらく^{しゆく}宿の景色を眺めながら、東に行くと南側に「奉安子育呑龍上人」の石碑があります。そこを降りていくと右手にある延命寺(臨濟宗)というお寺があり、ここに 있습니다。この呑龍堂は明治16(1883)年に群馬県太田市の大光院より分霊して建立され、毎月8日はお詣りの人達で賑わっています。

呑龍上人は、太田道灌から四代目にあたる岩槻城主太田資正^{すけまさ}に仕え、一ノ割村(現在の埼玉県春日部市)に住んでいたお侍の子どもとして、弘治2(1556)年にこの世に生を受けました。幼名は竜寿丸。近所の菩提所の圓福寺の住職から日常の礼儀や作法を学びました。

13歳で出家。永禄12(1569)年隣村の平方村(現在の埼玉県越谷市)の大善寺(のちの林西寺)に修業に入りました。その後江戸の増上寺などで修業し、慶長18(1613)年に徳川家康公より大光院第一世を拜命。その後元和6(1620)年に離山。翌7(1621)年に大光院に帰山し、「太田の呑龍さま」と呼ばれ、子育て呑龍様として親しまれています。

元和9(1623)年、68歳で示寂。

延命寺には、呑龍講という講があります。

呑龍講は戦前からあり、子育て、安産のための講で、各町内ごとに講の世話人がいて、青梅(旧青梅町)全域、霞地区、成木、奥多摩、古里、長岡(瑞穂町)の人達が入っていました。子ども中心で、赤ちゃんが生まれた時から、小学生・中学生位まで入っており、この講に入っている人は講金を払います。

この講に入った子どものことを男女関係なく「呑龍坊主」と呼び、お寺に入ったことと同じに扱われたものでした。

4月8日はお釈迦様の誕生日で花祭り(灌仏会)があり、呑龍様の御開帳があります。

講中の人には事前に呑龍坊主の人数分の供米袋が渡され、当日、中にお米を入れて納めました。そのお米を集めて、買ってもらうことにより現金に替えました。ロウソクを

たててお詣りし、ご祈祷のお礼をもって帰ったものでした。また、子どもの成長を願い、焼印を押した「おしゃもじ」も一緒に配ったそうです。

昭和40(1965)年代位までは、お団子屋、煮物、コンニャク屋、などの総菜屋や電気飴、水飴、おもちゃ屋、カルメ焼き、お面などの露店が多く出て、お寺の境内だけではお店が入りきらずに、坂の両端と、坂上の伊勢屋（現在は無い）から道味辺りまで、80軒位の露店のお店が並んで人が歩けない程、賑やかだったそうです。

当時は近所に機屋はたやさんがあって、女工さんも沢山いたので、夜中の12時頃まで境内は賑やかだったそうです。

また、パノラマ鏡という箱（大正3(1914)年に作られたものが、現在残されています。）があり、1回1銭を入れて中を覗くと、現在の3D画像のような景色を見ることができるものがありました。最後に、おみくじが出るようになっていました。

最近までは3～4軒位の出店がありましたが、現在、露店は出てはいません。毎月の講はお詣りする人数が減ったものの現在も行われています。

昭和の初め頃までは、吞龍様の絵馬も奉納されていました。



<話を伺った人>（敬称略）

大久保芳木・杉山実

<参考文献>

桑原恒久／文，吞龍上人絵伝刊行会／編（2006）『人間愛に生きた子育吞龍上人絵伝』（吞龍上人絵伝刊行会）

（文責 東山啓子）